

2021年度GTセミナー 第55回保育環境セミナー 物的環境編 前編①

第229号 2021年7月19日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

物的環境編 前編①

2021年7月17日に「第55回保育環境セミナー」
(物的環境編 前編)を新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から110施設を超えるお申し込みを頂きました。
前回までは「空間的環境」についてお送りしていましたが、
今回は第2編目「物的環境」についての前編です。

「物的環境」について藤森代表から考え方をお示し頂きました。

【セミナー開催趣旨】

乳幼児教育は、その時期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることが基本です。たとえば、赤ちゃんにハイハイをさせようと思ったら、その手順を教えるのではなく、自分から移動したいという動機(欲しい「もの」が前方にあるとか、抱かれない「ひと」が少し先にいるとか)を持たせ、そこまで行くための距離「くうかん」が必要になってくるのです。そこには、もの、ひと、場(空間)が関わってくるのです。そのために保育者は、乳幼児の主体的な活動を促し、乳幼児期にふさわしい生活が展開されるように、子どもが自発的、意欲的に関われるように、物的・空間的環境を構成しなければなりません。

そこで子どもは、それまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得し、心身を発達させていくのです。今年環境セミナーでは、「くうかん」「もの」「ひと」という環境について具体例を通して基本から学んでいきます。

ギビングツリー代表 藤森平司(新宿せいが子ども園 園長)



第55回保育環境セミナー 基調講演（物的環境編）

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さんおはようございます。前は「空間」についての話をしましたが、前は、私たちは「環境を通して保育をする」。それを見直そうということです。例えば、子どもたちにどんな力をつけた方がいいかよく言われるのが、非認知能力。それをどうつけるか。具体的な物があまり出てこないの、今回は具体的な話をしようと思います。私の園の例ですので、必ずしもいいとは限りません。保育環境研究所ギビングツリーがあって、一つの保育を考えて、一つは藤森メソッドでその一例が新宿せいがです。実践例ですので、自分の園の環境の中で、文化や人数、風土の中で行うものなので変えてもいいと思います。具体的な物がないとヒントがないので、具体例を話しますので自分の園なら、どんなものがあるのか話してみてください。そのヒントとして聞いてもらえたらと思います。

—「もの」の考え方—

物というと、よく言われるのが遊具や教具。買うときに保育カタログを見て、カタログにもものが載っています。これはものだけが多いが、外国、特にドイツと考え方が違います。ドイツのカタログを見ると、すべて子どもと家具、物が写っていること、子どもが使っている写真が多いです。日本では、机なら机がずらっと並んでいますが、それドイツではどう使うかが載っています。物はどう使うかです。ドイツの保育業者が日本に来て話をしたことがある。日本は机を買うときどう選ぶかを聞かれたことがあります。ドイツでは、どんな保育をするかで机を選んで。どういう保育かをドイツの業者にプレゼンしてもらったら、陶冶プログラムから話しはじめて、歴史があって今の形になり、そのためにこういう机があると話をされた。「日本の保育業者社は、そうやって売るのでですか？」と聞かれた。日本は価格の比較だけで、どういう保育かが論じられない。机・椅子一つにも保育があるといった。その中で、ドイツに行ったときに、日本のカタログを持っていきました。その中で最初言われたのが、エプロンシアターの人形を観て、ドイツの方がこれは誰が使うのですかと聞かれ、先生が使いますと言ったら驚いていました。子どもが使う人形はあるのですかと聞かれ、カタログにはないですね。ドイツに行ったときに部屋に置いてあった人形は、子どもが使います。エプロンシアターを先生がやりますということに、ドイツの方は驚きます。それによって子どもの何を育てるのですかと聞かれた。部屋の中にあつた舞台です。子どもたちが遊びの中で演じたり、見合うものです。人形一つ見ても、物自体が問題ではなく、どう使うかが大事です。うちは見学者が多いですが、こんなもの、あんなものがあると見るだけではなく、どの場所で、どう使うかで、子どもの何を育てるかがないと、物が置いてあっても意味がないですね。例えば、指人形を見ると、外国のもので子どもが使っている写真があります。売っている人形にしても、すべて先生ではないです。ただ大きな人形の形をしたものを、小学校の先生が使っているのは見たことがあります。第三者として人形を使って、腹話術みたいに使っていることはありましたが、劇は子どもたちの中で行っていました。うちの園でも、ドイツから戻ってきてから、そういう設定をしたら子どもたちが舞台上で演じ始めました。私の園では、お楽しみ会を345の劇をしますが、最初は絵本を読んで、どの絵本に興味を持つか。持ったらその絵本のセリフを言いあつたら、ペープサートを使うと子どもたちはやり合つて、次第に劇に持っていく。それも先生たちがやるわけではないです。物はどう使うかがあります。物の使い方もあるが、例えばブロックをその都度片付け、きれいに片付ける。次の日、カードがあつてまだ途中だと続きをやるというカードです。これはルールとしてではなくて、帰る時間になるとその都度片す程度と、続きをやるようにするとブロックも大きくなっていく

ことがある。ブロックというものだけではなく、使い方だけではなく、ルールやり方によっても意味が違ってきます。年長の子でお城が好きの子がいた。先生が城や城下町の写真を置いておいた。子どもたちは箱を使って城を作りはじめた。女の子たちは城の周りに、城下町を作りはじめた。女の子たちがどこからかコンビニ、動物園を共同して作りはじめた。細長いブロックがあるんですが、城壁や石垣を作った。天守閣を作ろうとしたら、ブロックがないと。子どもたちから三角を作りたいので、ブロックが欲しいと要求されました。これを作りたいからこれが欲しい、それが手に入らなかったら、制作ゾーンで、紙で天守閣を作ってくることをします。その物自体もあるのですが、どう使うか、どう使わせるか。広げるために、先生は何をすることがなければ物自体ではないです。カタログだけではわかりにくいですね。

— 「もの」という環境 —

子どもたちは、様々なものを媒介として遊び、生活していきます。しかも、その媒介としてのものへのかわりは、子どもからの興味、関心から働きかけていかなければなりません。

— 子どもからの興味、関心 —

保育室は、子どもの好奇心を満たすミュージアムでなければなりません。また、子どもたちの欲求は、その時期における発達を促すものであることが多いのです。子どもたちの選択をする話を、ある講演で話しました。345で異年齢の話をしたときに、子どもたちに選択させると言ったら保護者から反対されました。3歳では自分で選べなくありませんかと。私は0歳のところに、ぐるぐるチャイムとTVゲームを置いたら選べませんか？TVゲームを始めますか？ぐるぐるチャイムをしますよ。高校生にだったらゲームを選びますよ。ただし、発達を超えたり、発達に行っていないものであれば飽きますね。その中で例えば、積み木は0歳は積むだけなのが、2個積む、3個積むと次第に電車、車にすると発達に沿って、同じものでも、長く使えるものもいい遊具と言われています。その子の発達に沿ったものはいいものと言われ、ブロックや本と言われています。それから制作もその年齢なりの書き方が出来ます。いろいろな発達に使えるものもいいものと言われます。物は、色々な保育自体に関係します、単純にカタログを見て、これがいいね！というものではないですし、大人の価値観で、これはかっこいいとか、しゃれていると子どもが遊ぶかは別ですね。最近は大人好みのおもちゃが多いですね、子どもがそれで、面白があるのかというインテリア的なもの多くあります。子どもが、それが好きかどうかは別物です。そのために発達を考えるとということで、具体的に見ていきたいと思います。まず0歳から見ていきます。

- ・手を使い始め、様々な運動機能の発達や新しい行動を獲得する時期

→押すもの、つまむもの、めくるものなどを用意

売っているものとは限らないため、手作り玩具を作ったりします。

- ・他者を認識しはじめる

→物をやり取りしたり、取り合ったりする経験をする

赤ちゃんは9か月を過ぎ始めたころから、他者を認識しはじめる時期なので、仲良く遊び順番に遊ぶことはできませんが、取り合ったりする経験をする。必ずしも人数を用意しないで、足りな目にして貸し合うとか、取り合って泣くこともあります。少しずつ経験をすることも大切です。

・おもちゃ等の実物に見立てるなどの象徴機能が発達する

→見立てられやすいものを用意する

現場でいるとごっこ遊びは、象徴遊びでよく使いますが、0歳の赤ちゃんでも、一人の子が積み木を食べる真似をして、もぐもぐして渡すと受け取った側がもぐもぐする。これは高度な遊びです。「それは積木じゃない？」と言ったら遊べない。食べ物と見立てて、自分も同じもので見立てている。言語の獲得に影響します。片方の子が、ウサギと言ったら、受け取ったもう一人がウサギをイメージする。そういうことが、0で行われてきますので、あまり具体的なままごと遊びの目玉焼きや、パンがあるよりも、フェルトで作ったものを食べる真似をすることの方が大事になってきます。例えば、押すものは段ボールに乗せて押すとか、押し車とかで押ししたり、摘まむものは、赤ちゃんはよく摘まむので、上からぶら下げるとか、絵本は中を見るよりも、めくる楽しさがある。読みなさいではなくて、次から次にめくるものがあるので、売っている玩具ではなく、発達に合わせて、手作りしていくことも大事になってきます。

—家具の選定（機能の選択）—

ロッカー：収納だけでなく、しまうことで子どもの何を育てるのか？

食器：その食器を使うことで、何を育てようとするのか？

そのために、どのような材質、重さ、形がいいのか？

椅子・机：どのような活動の時に使うのか？

そのためには、どのような大きさ、形状、高さがいいのか、機能があるのか？

一時期、陶器がいいと言われましたが、手で持って食べるなら、陶器は重いので持って食べるのは無理ですね。メラミンはよくないといわれますが、何年か経つと取れて良くないといわれるが、持って食べることを重視するなら、定期的買い替えるなら、使うこともあり得ますよね。スプーンですくって食べるなら、食器は動かないものにしないとイケないですし、スプーンに斜めになって落ちてしまうので、重いものにして、角が立ちあがっているものにするとうすくえます。重いものから持てるものにするとか、その時期によって何を育てたいかによって変わってきます。何を優先するかが大事になってきます。日本では空間的なことでもそうですが、子どもの躰や道徳に持っていきますが、物の形状によります。その物の選び方も家具もないといけないと思います。（次号に続く）

本稿は、2021年7月17日に行われた「第55回保育環境セミナー」の基調講演の内容をまとめたものです。

（文責/奥山卓矢）